

## 教育手法

- ◇ 教育の手法には、様々なものがあります。どの手法がいいのか、誰にも答えることはできません。なぜならば、教育には、教師と子どもそれぞれの相性というものがあります。なので、その手法がいいか悪いかは、やってみないことには分からないのです。服や髪型と同じで、人によって似合う似合わないがあるのと同じです。
  
- ◇ もう一つ、ねらいによっても手法の善し悪しが変わってきます。「リーダーシップを発揮させたい」というねらいと、「子ども主体のクラスを作りたい」というねらいでは、とる手段が異なるのは、よくお分かりですね。昼食を「ヘルシーなランチにしたい」のか、「がっつり食べて満腹になりたい」のかという違いがあって、それぞれに善悪や良否はないのと同じです。

ちなみに、食べ物などには、一方で身体にいいと言われているものが、他方では最も悪いとされていることも多々あります。そして、どちらの説にも「真実」が含まれるのです。それは、人それぞれに体質が違うのですから、当たり前のことなのです。「人間」というカテゴリーでは、大きすぎるのでしょうか。
- ◇ 学級というものも、それと同じように考えてみたいと思っています。学級というのは、教師と子どもの複合体です。同じ教師がもっても、今年クラスと、次年度のクラスは全く違うのです。だから、去年うまくいった手法が、今年は全く使えないということもよくあります。

では、どうしたらよいのでしょうか。それは、端的に言えば、手段を変え続けるしかないということです。子どもによっても変えます。ある子どもには丁寧に教えますが、ある子どもは見守るだけにする、ということもあります。調子によっても変えます。家庭で何かあって、子どもが落ち込んでいる時は、いつものことを流すことだってあります。もちろん、時期によっても変えます。学級開きの4～6月と学級終いが近づいた1～3月で同じ手法が使えるはずがありません。
- ◇ このことから考えると、もっとも大事なことは、「自分の引き出しの中身を増やすこと」だと思います。特に若い時こそ、最優先で取り組んでほしいものです。選択肢が多い方が圧倒的に有利なのは、火を見るより明らかです。

校内で同僚や先輩に教えてもらったこと、研修会に参加して学んだこと、本を読んで知ったことなどで、これは使えると思ったものは、まずやってみることが大事ではないかと思います。ただし、それを「絶対視しない」ことが大切です。その上で、今の状況に合うものを取捨選択しながら、修正を加えつつ、自分の引き出しに入れるようにします。教育の手法の価値に、絶対は存在しませんので…。